

四季おりおり



花見

花見は奈良時代の貴族の行事が起源と伝わっています。当時は中国から伝来したばかりの梅が鑑賞されていましたが、平安時代に桜へと変わってきたようです。

花見の風習が広く庶民に広まっていったのは江戸時代、徳川吉宗が江戸の各地に桜を植えさせ、花見を奨励してからだと言われています。

夜に花見をすることは夜桜(よざくら)または夜桜見物(よざくらけんぶつ)と呼ばれ、桜に独特な習慣です。一部の公園や寺社などでは夜桜のためにぼんぼりを設置しているところがあります。

花見につきものといわれている花見団子は、庶民の花見にふさわしいお供として江戸時代から定番となっています。月見で食べる月見団子と対照的に桜色・白色・緑色で華やかな気分を盛り上げます。

桜色は桜を表わして春の息吹きを、白は雪で冬の名残りを、緑はヨモギで夏への予兆を表現しているそうです。

【七井橋付近の桜(枝垂れ桜)】



井の頭恩賜公園